

文献紹介: Sever Pop の La Dialectologie

著者	沢木 幹栄
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究12: 44-50 (2020)
発行年月日	2020-05-01
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022227

文献紹介：

Sever Pop の La Dialectologie

沢木幹栄

標題の書は 20 世紀なかばまでの世界の方言学の歴史を国ごとに概観した方言学の百科事典的なものである。フランス語で書かれ、ながらく再刊されることがなかったため、日本ではほとんど知られていない。しかし、方言学の歴史を知るうえで非常に重要だと考えられるので、最終号の貴重なスペースを使ってこの書の紹介を行いたい。

まず、正確な書誌情報は以下の通りとなる

書名 La Dialectologie (日本語では「方言学」)

著者 Sever Pop

発行者 ルーヴアン大学 (フランス語で書かれているのでルーヴアンとしたが、ベルギーのルーヴェンのことである)

刊行年 1950

2 冊本 (第一巻 787 ページ 第二巻 602 ページ)

フランス語で書かれていることもあるが、非常に分量が多く (ワードの語数カウントによれば上下あわせて 57 万語) 手強い本という印象である。本当はこのうちの一部でも翻訳して公刊すべきなのかもしれないが、頻出する人名・地名などの固有名詞の読みや、歴史上の事件や法律名などの訳が確定しにくいこともあって翻訳は難しいと思われる。著者は 50 年以上前に亡くなっているので著作権の問題はない (2011 年に著作権が切れた。著作権が死後 70 年で切れることになったのは 2018 年だが、一度消滅した著作権は復活しない)。私的に翻訳をして限られたサークルのなかで回覧する程度であれば、おおざっぱな翻訳でも許されるかもしれない。

筆者がこの書にたどり着いたのはヨーロッパの方言研究の歴史を調べる必要に迫られたのがきっかけである。不思議なことに英語で書かれた方言学の概説書をみると言語地理学で方言研究が始まったかのような記述がある。しかし、日本の例を見ても近代的な学問とは言えないにしても江戸時代から方言の研究は続けられてきた。言語地理学はせいぜい 19 世紀末に近い頃にフランスとドイツで始まったものであり、それ以前に方言研究が全くなかったとしたらそれはおかしい。

そこでネットのアーカイブで探索をしたところ、検索に引っかかったのがトロント大学のアーカイブの *la dialectologie* だった。驚くべき内容の書であることはすぐに分かったが、もとの本をスキャンして OCR をかけたテキストファイルであり、文字化けがほとんど毎行にあるような状態であった。とりあえずはこれをワードで取り込んだ。

原書が国研の図書館にあることが分かって、これを参照しながら文字化けを修正し、現在ほぼ完全なテキストが手元にある。ワードのファイルがあれば、それを PC の画面に出しておいてそれを参考にして翻訳などの作業ができる。

ここまでの手間をかけたところで、最近判明した（熊本学院大学の石教授のご教示による）のはネット書店（アマゾン）に Classics reprint の一巻として *La Dialectologie* が販売されていることである。著作権切れのため自由にリブリント出来る状態だったのだ。70 年ちかく再版されていなかったものがこういう形で入手がたやすくなるのは歓迎すべきことである。実際にネットで注文したところ、1 ヶ月後にロンドンから現物が届いた。

この書はたまたま現代の日本の方言学で言及されることはないが、柴田武の『言語地理学の方法』では参考文献としてその名が挙げられている。知っている人は知っているのである。柴田はグロータースから聞いていただけでなく、1956 年にヨーロッパに行った際、ルーヴェン大学で著者のポップとも話をしたらしい。

それでは本書の内容の紹介に移る。

ポップ（1901-1961）はルーマニア人だが、かの国の人にはよくあることでフランス語文化圏との親和性が強く（ルーマニア語がフランス語と同じくロマンス語の一員であることを想起されたい）、フランスで方言研究の教育を受けた。後述の *Orbis* に直接教えを受けたジリエロンの思い出を書いている（"Jules Gilliéron et Mario Roques, souvenirs", *Orbis* 6・1, 1957）。

ルーマニアで言語地理学の実践を行ったが、第二次世界大戦の結果としてルーマニアが共産圏に組み入れられたために本人はおそらく亡命をしてルーヴェンの方言センター（グロータースの父、L. Grootaers の創設による）の長として方言研究の雑誌 *Orbis* の刊行などに力を尽くした。この *Orbis* が当時としては珍しい方言学の（だけではないが）ジャーナルであった。『イタリア言語地図』を作った Jaberg と Jud や Dauzat、ニューイングランド言語地図の Kurath らが存命中で、本人が論文を寄せていたり、ポートレートと称する業績の紹介や略伝があったりする。オランダ言語地理学の Kloeke やグロータースの父、Ludvic Grootaers のことも私はこの雑誌で知った。ほかでは知り得ない貴重な知識や情報が得られるのである。

この Pop が戦後まもなく欧米各国各地域の方言学の歴史をまとめたのが本書である。グ

ロータース (W.A.Grootaers) が「百科事典的な著作」と呼んだものを独力で作った (ロータースを含めヨーロッパ中の協力者は数多くいたが) のだから恐るべき碩学と言わねばならない。

全体は概説と個別言語の方言研究史に分かれている。概説は全体をまとめて要約したものと考えてもいいが、これだけでも『方言研究史』として、一冊の本にしていいくらいの分量と内容である。ヨーロッパの言語地理学以前の研究史を調べるうえで非常に役に立った。この本全体がフランス語で書かれているうえに非常に文字量が多く、全部を読み通すのための時間も労力もないからである。むしろ、概説のなかで気になるところがあったら、それに対応する内容の箇所を個別言語の章で探してじっくり読むという読み方がお勧めである。

個別言語の研究を扱った本文の章立ては以下のようにになっている。

ロマンス語

フランス

フランコプロヴァンス

プロヴァンス

カタロニア

スペイン

ポルトガル

イタリア

ラディン

ダルマチア

サルディニア

ルーマニア

非ロマンス語

ゲルマン語

ドイツ

スイス

ルクセンブルク

ベルギー、オランダ

スカンジナビア (デンマーク、スウェーデン、ノルウェー)

大ブリテン島

USA、カナダ

ケルト語

アイルランド語

ゲール語

マン語

ウェールズ語

コーンウォール語

ブルトン語

スラブ語

スロベニア言語地図

カルパチア山脈以南ポーランド語地図

ソルブ語言語地図

チェコスロバキアの方言研究

チェコ語

スロバキア語

ルテニア（ウクライナ）語

ソ連の方言研究

フィンウゴル語

フィンランド語

エストニア語

ハンガリー

現代ギリシア語

アルバニア語

ベルベル語

バンツー語

アラビア語

インド

中国語

朝鮮語

個別言語の研究史はロマンス語と非ロマンス語に分けられ、ロマンス語だけで第一巻を占めている。非ロマンス語は第二巻に当てられていて、相対的にロマンス語の比重が大きいことがわかる。

たとえば、フランス語は 155 ページが与えられているのに対し、ドイツ語はたったの 27 ページである。しかも、フランス地域はこれだけにとどまらず、フランコプロヴァンス（ランシュコンテなどのフランス南東部の山岳地帯。スイスの一部も含む。）とプロヴァンスにはそれぞれ独立の章が与えられている。その結果としてフランス地域だけで第一巻の半分を占めている。

ある程度のスペースが与えられた言語（地域）は大体同じスタイルで記述されているのでフランス語を例にとると、まずその方言が使われている地域が記述される。フランス語の章はフランスの方言を二分するオイル語とオック語のうち、オイル語地域であることが明らかにされる。次にその方言の研究史が述べられ、そのあとで注目すべき研究をいくつかあげてそれぞれに十分な紙幅を与えて詳述する。たとえば、『フランス言語地図』は 25 ページを費やして記述され、これ自体一つの論文として成立している。

このようにフランス語の方言学に多くのスペースを使ったのは、上述のようにポップがフランスで言語地理学の教育を受けたことと無関係ではない。彼が目にする文献はフランス語のものが多かったことは想像に難くない。大学教育は第一次大戦前までオーストリアハンガリー帝国の町だったクルージュで受けたので、ドイツ語も自由に使えたはずであり、フランス語のほうが得意だったからという理由でないことは確かである。

さらに、ジリエロンの弟子として、方言研究の主流はフランスにあるという信念があったのではないと思われる。

ポップが非常に熱心を書いてくれたおかげで、Dauzat がオーベルニュの方言についてどんな研究をしたのか、あるいは Jud と Jaberg の『イタリア言語地図』がどんなものなのか知ることができるのはありがたいごとであり、そのメリットを考えればドイツ語の研究が不当に軽く扱われているという難は相殺されるのかもしれない。

非ロマンス語は地球に存在するロマンス語以外の言葉がすべて当てはまるのだから、ロマンス語と非ロマンス語という分類は奇妙なのだが、これだけ記述の分量がアンバランスだところするしかないのだろう。

非ロマンス語に入れられているのは、世界中の言語のなかからゲルマン、ケルト、スラブ、現代ギリシア語、アルバニア語。ここまでがインドヨーロッパ語族だが、バルト語派がない。アルメニア語もない。それにスラブ語派の記述があっさりしすぎている。

次に来るのがフィンウゴール語（ハンガリー語、エストニア語、フィン語）でここまで

がヨーロッパで使われている言語である。アフリカの言語のベルベル語、バンツー語がそれに続く。アフリカのつぎにアラビア語、中国語、朝鮮語と来て終わりとなる。

アジアの言語ではトルコ語系の言語が分布が広大で方言も面白いだろうと思われるのだが、全く無視されている。1950年時点ではめぼしい研究がなかったのだろうか。それから朝鮮語の記述はあるのに日本語という項目が立てられていない。実際は日本ではそれなりに方言は研究されていた。だが、研究成果は日本語で発表され、英語や独仏語での発信はなかった。朝鮮語という項目が立てられているのはひとえに小倉進平の研究が知られていたことによる。オーストロネシア語族（マライポリネシア語族）もまったく触れられていない。

このように取り扱い方の精粗によって、1950年当時の言語や地域によって異なる方言研究の歴史の厚みがわかる。また、日本の方言研究がヨーロッパから見ればブラックホールのようなものだったことも分かるのである。

概説に戻る。言語地理学以前に何があったのか知らない我々にとってここに書かれていることは驚き以外の何ものではない。概説にあることを粗く非常に簡単にまとめると以下のようなになる。

ヨーロッパでは16世紀頃から方言に対する関心が高まってくる。フランスでは革命を契機に全国的なフランス語の使用調査が行われ、その結果としてパリのフランス語を普及させるための制度が作られた。その反動として方言研究が盛んになり、記述的な研究も行われるようになった。

ドイツでは18世紀の後半から方言辞書や方言の文法研究がされるようになったが、19世紀の後半、1876年のジーファース (Sievers) の”Grundzüge der Lautphysiologie” (『音声生理学の基礎』) の出版が刺激となって音法則の規則性を実証するための材料として方言が盛んに研究されるようになった。

19世紀末のフランスのルスローの研究などは今の基準で見ても全く古びていない。言語地理学以前にもレベルの高い方言研究(記述的研究や社会言語学的研究)が行われていた。言語地理学的研究が行われるようになって20世紀に入るのだが、言語地理学と並行して記述的研究が行われている。

これは本書では(当時のヨーロッパ人にとって)自明なことゆえあまり詳述されていないのだが、ヨーロッパの近代の言語生活を考えるときにラテン語を無視することはできない。近代国家が成立するとそこではラテン語以外の共通語が求められる。そのときに方言が強く意識されるようになるのだろう。方言研究の歴史を考えると、政治史の流れやリ

ングワ・フランカとしてのラテン語の盛衰にも思いを致すのが正しい認識に到達するうえで必要であるのだが、どちらも 70 年前のヨーロッパ人には言及するまでもないこととされていたのだろうか。

ヨーロッパの方言研究史が日本に住む我々にとって意義があるのはそれが我々のよく知っている言語地理学の源流を知ることにつながるからだけではない。江戸時代の方言研究と同時代のヨーロッパのそれがある点で平行的な歩みをたどっている（17 世紀のヨーロッパの植物研究者は植物の方言名に関心があった。これは日本の本草学と同じである）こと、ヨーロッパでは多くの言語が同時に存在し方言の違いが言語の違いと同列に扱われる面があったこと、社会体制の変化することで方言に関心が持たれた（国民国家ができると標準語が求められる）ことなど方言研究のあり方について考察を深める材料がそこにある。

また、19 世紀に方言の社会言語学的研究があったというのは驚きである。日の下に新しいものなしということわざの通りで、過去の研究にも目を向け、そこから大いに学ぶこととしたい。